

法の水茎

(38)

大正大学講師 高橋秀城

夏と秋と

行きかふ空の

通ひ路は

かたへ涼しき

風や吹くらむ

〔古今集〕躬恒

（夏と秋がすれ違う空の道には、片方にだけ涼しい風が吹いているのだらう）

今年（ことし）は八月八日に秋の始まりとされる「立秋」を迎えました。古くは「秋立つ」と呼ばれ、この頃からは朝夕の風にも秋の訪れを感じます。ふっと空を見上げれば、夏の夕立を運んできた入道雲に変わって、いつしか天高く鱗雲が棚引いています。さざ波のように見える空の道には、どのような涼風が吹き渡っているのでしょうか。

ものです。この時期なら「夏バテ」（夏負け）もあるでしょう。真夏の直射日光や暑さによる疲れは、最近では「八月病」とも言われるようです。「五月病」はよく耳にしますが、心身の不調は季節を問わず、いつも身近に潜んでいるのでしよう。仏教では、病気になることを「四大不調」と言います。「四大」とは、この世界の全てを形づく「地・水・火・風」の四つで、これらは人間の身体にも欠かせません。例えば、「火」が盛んになると発熱を起すように、それぞれの調和が乱れると、心にも身体にも悪影響を及ぼします。「百八煩惱」という仏教語があるように、人間には百八の悩み事（欲望）があるとされています。

では、病気にはどれくらいの種類があるのでしょうか。もちろん医学の進歩によって日に日に新発見がなされていますが、仏教では四百種類の病原があると説きます。先ほどの「四大」に当てはめて、「地」の病に百一、「水」の病に百一、「火」の病に百一、「風」の病に百一あって、合わせて



入道雲そびえる夏空も、やがて秋風を運ぶ

「四百四病」となるのです。

中国の道宣（五九六～六七七）という僧侶は、

四百四種の病は宿食を根本とす

（道宣『浄心戒観法』）と語りました。万病の元とされる「宿食」とは、食べ物や消化されないうで胃の中にある状態を意味します。まさに夏の終わ

りに気をつけたいことでは。また、これは食べ物にかかわらず、心のしこりを抱えたままの生活にも通じる戒めと思われま

病氣から思い起こされる諺に「病は氣から」があります。一般に、病氣は氣の持ちようで軽くなり、重くもなると言う意味ですが、では、具体的にどのようない気持で過こせば良いのでしょうか。

江戸時代の『耳囊』という書物に、玄武庵という百歳ぐらいの医者が語った言葉が書き留められています。

人は、欲望のために自分に勝つことができず病を起すのです。田畑や草木を育てるような気持ちで工夫をしてみてください。人間から鳥獸・草木に至るまで、自性（そのものが備えている性質）と適応すれば病氣になることはありません。もし、田んぼに植えるものを畑に植え、肥やし

夏山遊歩

厚木市 荒井 一雄

温熱気南来

涼冷氣北来

上下高尾山

暮蟬山花開

あたらしき

經典まなぶ決意にぞ

龍樹菩薩の書をひらきたる

温かき熱気が、

南より来たり、

涼しき冷気が、

北より来たる・・・

高尾山を、

上り下れば、

暮蟬は、山花を開かせたり・・・

折り折りの記 (72)

波多野 重雄

秋立つや琵琶瀧の谷天女舞ふ

八月八日、立秋である。暦は秋だが未だ、暑さが続く。江戸の俳人、鬼貫は「秋立朝は、山のすがた、雲のたたまひ、木草にわたる風のけしきも、きのふには似ず。心よりおもひなせるにはあらでおのづから情のうごく所なるべし」とある。早朝、急峻な琵琶瀧径を長い髪の艶やかな出立の中年女性が私を超越し、軽快な足取りで駆抜けた。宛ら天女の舞を見る思いであった。

（高尾山健康登山親睦会々々長）

のいらぬものに、必要以上に肥やしを与えたらば、全ての作物に病がでてしまいます。

人間も同じです。一人一人が自分に相応しい毎日を送れば、病氣にはならないはず。己に勝つことができない凡情（つまらない感情）によって自身に負けて、飲食や衣服をはじめ、度を越えた生活から病が起ります。これを「病は氣から」と言うのです。

（根岸鎮衛『耳囊』）

これまで私は、「病は氣から」について、何となく気持ちをしつかりと引き締めるという程度の意味合いで考えていました。しかし、この老練な医師の教えによって、正しく自然と一つになることが病にかからない秘訣であることを知りました。これは、先に述べた自然と自分の「四大」（地・水・火・風）を重ねて、一体

となって生きることも結びついていくでしょう。お釈迦様の在家信者で

歴代先師お墓参り



本年もお盆を迎え、七月十二日には山麓不動院にて施餓鬼会、十三日と十六日には、それぞれ迎え火と送り火を焚き、歴代先師墓地にて、懇ろに御回向されました。

十三日は厳しい夏の日差しが注ぎ、十六日には強い雨に見舞われるという対照的な日となりましたが、両日とも静かに祈りが捧げられました。